摩訶衍

（大正十五年二月二十日發行）

我が校の本領

福島愍雄

本校の目的は現學則第二條に、本宗學衆以上の僧侶にして教師たらんとする者に須要なる高等教育を施す所とす、と規定されてあるから、別段、我校の本領杯と叫ばぬでもよい樣なものゝ、從來から今日迄は、東に宗教大學、西に本校と、東西二校駢立して居つて、孰れも修業年限本科三年、而かも同一學科を教授して居つたのである、夫故、一宗の輿論として同一種の學校二個存立の要なしとの聲喧すしく、從つて本校の存立が危まれて居たのであるが、一宗の教育尊重論者は大學令による大學は一宗の力として之を支持し得ないから、各宗と聯合して實現するのを良策と認め、此學術研究目的の大學が實現せられたる曉は、專門に高等教師を養成するの宗立專門學校一校を存置せんとの腹案を以て進んで來たが、已でに大學は三宗派聯合して東京に置くに決定したるを以て、宗立專門學校は本校

を其儘之に充つることゝなし、本春、宗務當局は、教育條例を定め、其施行規則として學科課程を內定せりと聞く。乃ち本校の基礎は此處に確立したから是れより淨土宗僧侶として恥ぢざる人物を養成することに、余は畢生の努力を拂はんとして居る、淨土宗僧侶、眞の本宗僧侶とは如何なる意義を有するか、之れが先決問題である、が、一言以て之を盡せば、宗祖の御心を以て心とすることである、宗祖は出離生死の爲めに出家せられ、念佛によつて出離の道を確立し、爾來、自行化他、唱名に餘念なかりしことは、今余が喋々するまでもない。併し此、判り切つた事柄が、果して我宗侶の全般に實行されて居るか何うかと、探求して見やうなら、眞に宗祖の御精神通り實行して居る者の寥々たることは誣言ではあるまい。又宗內學校に在學せる學生は過去も現在も、自然科學や、哲學類は喜んで學習するが、宗乘と云へば喜ばない傾きが有る、念佛の法味を愛樂せざる者の眼には宗乘は半錢の價値もない樣に映ずるは無理もない事である、之は獨り學生の罪のみに非ずして、宗乘敎授其人に信仰なく唯學究的に宗乘の講授をなす人ありたる爲め煩鎖なる講義に慊焉して、宗乘を嫌忌するに至りし徑路なきにしもあらずと惟ふ、平素念佛精進して、唱ふれば我も佛もなかりけり底の信仰者が敎壇に起つて宗乘を講ずれば、片言隻句、光彩陸離として、吾人の心眼に透徹す、さあれ機類萬差、或は、宗乘に導かれて念佛するもあるべし、念佛精勵の結果宗乘を翻讀するもあるべしと雖も、能化たる者は先づ念佛勤修、其眞味を體得したる上宗乘を讀み且つ講ずべきである、斯くして、所化、學生、宗乘に

趣味を感ずるに至らば、宗祖の御心を體驗することが出來やう。

萬善の妙躰は名號の六字に即し恒沙の功德は口稱の一行に備ふ、如來は智德雙備の覺者に在します彼の德本行者を觀よ、諸宗の學解なく、百科の學を習はずと雖も、智解縱横にして、緣山雲霞の學僧を後へに瞠若たらしめたではないか、唱名の積功によつて所知の障碍を滅却すれば、宇宙廓然、森羅萬象、胸底に顯現す、所謂餘乘、哲學、科學、歷然として心眼に映發す。されど、萬人共通に此靈域に達すること容易ならざるの故を以て、宗門學校の學科に餘乘及補助學科を加ふ、餘乘や普通學科を研習するの目的は宗乘の眞價を比知せんが爲めである。然るに其實は種々雜多就中矛盾撞着の知識を積集して之れを咀嚼もせず、又調和もなさゞるが故に、餘乘や他の學科を學んで却て宗乘に疑義を生じ、信根を枯死せしむるに至る者鮮しとせず。そも、之れ誰れの罪か、學ぶ者の非か、敎ふる者の非か、思ふて此處に到れば、吾人、宗門敎育家の責任のいやが上にも重きを感ぜざるを得ない。敎育の方法は詰込み主義でなく、理解主義であることは百も承知して居ながら、矢張、舊式の詰込みに成り勝ちとなる、又矛盾撞着の調和を試みなければならぬと知りながら、各科專門に分かれ此統一の任に當るの人がないことを遺憾とす。余は學生諸氏に勸奬す、先づ自ら念佛せよ、學校だからとて學解にのみ偏重してならぬことは、猊下入學宣誓の御訓諭にある、朝晝時は其餘暇なかるべし、昏夕閑時を見て稱名念佛すべし、然かすれば矛盾の解決直ちに就くべし、難解の句文も自ら理解さるべし、固よ

り餘乘、科學は宗乘の補助學科である、庇貸して母屋を奪はるゝの愚を演ずることなかれ、内に燃ゆるが如き信仰心湧起して如來の慈悲に感應すれば、進止動作、一擧手一投足の些事に至るまで、如法となり、共存共榮の實を擧げざれば已まざるに至る。

余の理想は前述の通りである、從つて之を我が校の本領としたいと思ふ。余先づ陣頭に立つて策勵せん。斷じて行へば鬼神も避く、能はざるに非ず爲さゞるなりの卑屈に隨すな、來れ！進め！英氣潑溂たる若き宗侶よ。

十四年十月八日　　鹿溪舍内にて記す